

// 卷 頭 言 (3) //

日本ライトハウス養成部長
芝田裕一

「視覚障害リハビリテーション」第50号までを振り返って

「視覚障害リハビリテーション」は、今号で一区切りの第50号を発行することになった。ここまで継続してこれたのも読者各位の支えと、三宅文庫として財団法人安全交通試験研究センターの資金的支えの賜物であり、ここで深く感謝申し上げたい。なお、当法人への同センターの三宅文庫としてのご援助はそれ以前からいただいているのだが、本誌へは第23号(86-6月号)からである。

この「視覚障害リハビリテーション」は、「視覚障害研究」という名称で1973年(昭和48年)12月に第1号(創刊号)が発行され、その後、1975年(昭和50年)2月に第2号、同年12月に第3号、1976年(昭和51年)6月に第4号というように不定期的に発行されてきた。第5号から筆者が拙いながらも編集を担当することになり、とにかく、定期的に発行しようということを目指して、1977年(昭和52年)6月に第5号、同年12月に第6号を発行し、以降、6月に奇数号、12月には偶数号ということで継続してきた。その間、第35号(92-6月号)から「視覚障害リハビリテーション」と改題した。だから、都合、26年で50号に達したことになる。

創刊当初は、学術的な研究ということをも明言してスタートされたのだったが、内容は必ずしも、そうはなっておらず、その方向性が明確なものとは言い難いものであった。筆者が引き継いだ後も編集者としての力不足もあり、その路線の継続や「視覚障害研究」という表題にもやや困惑するものであった。それは、視覚障害リハビリテーションというものの自体が産声をあげたに近い時期に、まだまだ「研究」というものを、それも研究機関ではない、一施設が担っていくことに時期尚早感をおぼえたからであった。

その後、「今、視覚障害と視覚障害者にとって何が求められているのか」という原点から方向性を考え直し、「研究」というやや狭義の概念から、現状に即し、さらに当法人(当時の職業・生活訓練センター)の力量の範ちゅうで精

一杯の貢献ができる「視覚障害者のリハビリテーション」という広義の概念で編集をしていくことに徐々に方向性を定めていった。そして、視覚障害者のリハビリテーションの中でも、特に生活訓練（社会適応訓練）というものをより意識して編集し、理念、その基礎的分野、訓練・指導の技法、施設の現状、一般社会の理解の現状等にスポットを当てて現在に至っている。「視覚障害リハビリテーション」への改題にはこういう背景があった。

1992年（平成4年）に、当法人の旧職業・生活訓練センターが組織を変え、視覚障害リハビリテーションセンターとなって、1970年（昭和45年）から始まった歩行指導者の養成が、養成部という独立した部で専任の教官を置いて実施できるようになった。筆者がその担当を任されるということもあって本誌は、それまでの内容に加えて、歩行を含む生活訓練の指導者向けの様相も帯びることになった。ただ、これまでの50号の中で一つの内容で特集を組んだことはなく、その時々論文が並立しているだけの編集に終始していることに、もの足りなさを感じる読者もおられると思うが、それは、やはり、編集者の力の足りなさであり、ここで深くおわびしたい。しかし、前述の内容に即して発行しているのは本誌が唯一であり、その面ではなんらかの貢献ができているのではと期待するところである。

ところで、この26年間を通して感じることは、昨今の視覚障害者のリハビリテーションは年とともに変化をしているということである。かたときも同様の状態を一定期間、維持していないと思える。我が国で視覚障害リハビリテーションが、まがりなりにも開始された昭和40年代では、その変化はそれ程大きくはなかったのであるが、現在、その様相は黎明期と比較するとかなり変わってきている。法律、理念に加え、視覚障害者の意識、社会の理解などが変わり、それによって訓練・指導の技法や施設のあり方も変わり、また、変わろうとしている、基本的には進歩してきたと言えることがその主な理由であろう。視覚障害者のリハビリテーションは、まるで生き物のようである。

それは、また、視覚障害者のリハビリテーションがまだまだ未熟なものだということをも示している。つまり、発展途上であるということなのであろう。それに携わる関係者、特に、我々指導者には努めなければならないことがまだまだ多くあり、歩みをとめてはいけない。本誌がその一助となるように51号からまた意を新たにしたいと思う。